

実践報告

国語科教育を基盤とする学級経営への支援 ～言語能力を磨いて育てる人間関係づくり～

遠藤真司

1 はじめに

2017年3月に告示された小学校学習指導要領総則の「第2教育課程の編成2(1)」には、「各学校においては児童の発達の段階を考慮し、言語能力、情報活用能力(情報モラルを含む。)、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力を育成していくことができるよう、各教科等の特質を生かし、教科等横断的な視点から教育課程の編成を図るものとする」とある。また「第3教育課程の実施と学習評価1(2)」には、「言語能力の育成を図るため、各学校において必要な言語環境を整えるとともに、国語科を要しつつ各教科等の特質に応じて、児童の言語活動を充実すること」とある。このように、学校においては、国語科を中心にして言語能力の育成に努めることが明記されている。

言語能力とは、文部科学省の調査研究協力者会議のひとつである言語力育成協力者会議(2006年6月～)で打ち出された概念で、「学校教育のすべての科目を通じて個人の自己表現、他者理解、共同生活の能力を助長することを目的として、狭い意味の国語力にとどまらないコミュニケーション能力、思考力を指す」用語として提案されたものである。

筆者は、これまでの指導経験から自己表現、他者理解の能力を培う言語能力を育む国語教育と、他者との良好な人間関係を築きあげる学級経営には密接な結びつきがあると考えている。しかし多くの教員はそのことを認識していても、どのような指導でこれに取り組むかについては、具体的な対応に戸惑っているのが現状である。そこで国語科教育を基盤とした学級経営の有効性を、実践校の取り組みを通して明らかにしていきたい。

2 国語科教育を基盤とした学級経営の有効性

2-1 授業と学級経営との関連

学級経営とは、学級におけるあらゆる活動のための教師の働きかけである。学級目標、学級ルール、組織(班編成、係、当番活動など)、学級活動、行事への取り組みなど、学級を単位とする教育活動をすべて円滑に進めていくことが、学級担任の役割である。しかしこれらは年度初めに学級生活の在

り方や、友達との過ごし方の諸注意などを明示して、それで済むというものではない。日々、学級生活を送るにあたり、子ども同士の良好な人間関係づくりが不可欠であり、それが土台となる。

子どもたちは一日の生活の大半を学校で過ごす。その学校で過ごす時間の多くは授業時間である。授業の中で鍛えられる思考力、判断力、表現力が、子ども同士がお互いを認め合い、助け合い、学び合う素地をつくる。つまり日々の授業で、自己表現、他者理解の力を伸ばし、相互理解をしていく過程を通して、数十人いる学級内の子ども同士の良好な人間関係が醸成されるのである。

2-2 授業時数が最も多い国語科

授業の中で、国語科が最も学級経営に有効と考える理由は二つある。一つめは、国語科は最も時数が多い教科だからである。どの学年でも他教科に比べると国語科の授業時数が最も多くとられている。特に入学期の1年生で見ると、国語科の次に時数が多い算数科と比べても2.2倍の時数にあたり、実に総授業時数の36%が国語科の時数で占められている。学校生活の中で最も授業時数が多い国語科の授業において、学級経営に直接結びつく子どもたちの人間関係づくりを考えていくことは、きわめて効果が高いと考える。

2-3 言語能力を磨いて育てる国語科教育

国語科が最も学級経営に有効と考える理由の二つめは、国語科は、言葉を大事にして、人間関係に直接影響する表現力を伸ばす教科だからである。

小学校学習指導要領国語編ではその目標として「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を育成すること」を目指している。そして「日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う」とある。子どもたちが、互いに仲良くなったり、協力し合ったり、あるいは感情面でぶつかったり、トラブルを起こしたりという、人としての関わり合いの場面では、ほとんどの場合、言葉が関係してくる。言葉によってその関係がよくなることも悪くなることもある。言葉はお互いの意思を伝え合うものだからである。その言葉を大事にして、表現力を伸ばす国語科の授業の充実が、学級経営を大きく支える力になると考える。

学級経営と国語の結びつきについては、末松（2016）は、「チーム化されたクラスとしての協働的問題解決能力を育てるクラス会議」を提唱しているが、これは「話すこと・聞くこと」の活動が大半を占める。二瓶（2015）は、学級づくりと言葉の力の関わりについて言及しているが、国語の授業そのものではなく、朝の会・帰りの会など授業に結びつく周辺のことから国語教室をつかって学級経営に生かすという視点である。

これまで語られていたこのような学級経営の視点と異なり、新たな視点として、「国語科の3領域と言語事項のすべてを学級経営に結びつける」という視点があると考えられる。「話すこと・聞くこと」で話す力・聞く力を子どもたちに付けて、伝え合う力を伸ばしていく。そのうえで「書くこと」「読む

むこと」と「我が国の言語文化」などの言語事項、つまり国語科のすべての領域と事項で培われる言語能力を統合して、学級経営に結びつく人間関係づくりを視点においた指導が可能なのではないだろうか。

3 実践校の取り組み—国語科教育を基盤とした学級経営の改善例—

3-1 経緯

2016年5月、東京都公立小学校のB校長からA教諭への指導講師依頼があった。5年生の学級（単学級）が、話し合いが成立せず落ち着かない状態なので、継続的に観察してA教諭へ学級経営に関しての指導助言をしてほしいという内容である。

この学校は地元住民との結びつきが強く、学校教育への期待が大きい。数年後には周年行事が控えている。ふだんから意欲を持って子どもたちの指導にあたるA教諭にB校長は大きな信頼を寄せている。現在学校で一番指導が難しいこの5年生を上手にまとめ、望ましい学級経営を学校全体に示して良い影響を広げていきたいということであった。

3-2 学級の現状

2016年5月下旬の訪問で、5年生の学級の授業を初めて2時間観察した。この様子は以下のものであった。友達が発言をすると、すぐに揚げ足をとる子が出る。頑張って発表する友達がいると、周囲の子が笑ったり、からかったりする場面が見られる。体育のボール運動でのゲームでは、失敗した子に対して複数の子が暴言を吐いて責め、それに対して大声でどなり返したり、泣いたりする子が出る。「うるせんだよ!」「死ね!」などの言葉が頻繁に出て、落ち着いた環境の中で学習に取り組む状況ではなかった。

B校長やA教諭、その他の教員からの話では、前年度までの担任の指導は、子どもの考えや思いをあまり尊重しないものであり、常に一方的な指導だったと言う。そのため、子どもたちは、何事に対しても積極的にはならず、受け身の学習態度となり、発言もあまり見られないようになったということであった。相手の悪いところを常に指摘し合い、非難して、それをきっかけに言い合うような関係となり、温かな人間関係が見られない状態であった。

3-3 A教諭について

教師経験9年の中堅にさしかかってきた教師である。仕事に対してとても熱心で責任感が強い。まじめで教材研究にも前向きである。これまでの指導経験の話を聞くと、子ども思いで、保護者からの信頼が厚かったのだろうと想像された。しかしまだ指導の幅は広くなく、子どもたちのさまざまな反応に対して柔軟に対応する力には課題があった。今回が初めての高学年担任であり、校内の教師たちが口をそろえて指導が難しいと言うこの学級の子どもたちに、自分の経験が通用するのか身構えるところがあった。

3-4 4ステップの指導計画

国語科を基盤とする学級経営の取り組みを実践するに先立って、A教諭と3時間にわたり話し合いを行った。A教諭は、この学級の子どもたちは、きっかけがあればその人間関係が変わるはず、すぐに言い争いになる現状を変え、まず話し合いを成立させていきたいということであった。そこで学級活動の時間を使って、今の学級の状態の振り返りを行い、今後どのように自分たちがしていきたいか、その方向性を子どもたち自身で話し合い、考えさせるよう指導した。

そのうえで、「国語科教育を基盤とした学級」づくりを展開し、常に学級の人間関係づくりを意識して、日常の授業から子どもを変えていくことの有効性を話した。もともと国語科を専門研究にしていたA教諭だったが、国語科の授業では、あくまでも国語科本来の目標をどう達成するかのだけが頭にあった。それと並行して子どもたちの人間関係づくりという視点で授業を考えることはなかったもので、この指導に大変興味を持ち、意欲的な姿勢となった。そこで筆者の指導のもとで、次のような学級づくり計画を構想した。

この学校は2期制の学暦なので5年生の前期・後期、6年生の前期・後期と卒業までに4つのステップでの指導計画を立て、段階的に言語能力を育て、子どもたちの人間関係づくりを深めていこうとするものである。図表1がその指導計画（略）である。

図表1 国語科教育を基盤とした学級づくり計画（略）

目 標	国語科の主な領域、事項、内容
第1ステップ 5年生前期（4～9月）	
話し合い活動が成立する	「話すこと・聞くこと」 <ul style="list-style-type: none"> ・オープンエンドの話し合いを多く設定して、気持ちを楽にして交流ができる雰囲気をつくる ・クローズドエンドの話し合いを徐々に設定して、良好な雰囲気の中で、自分と友達の考えの共通点、相違点を表現できるようにする。
第2ステップ 5年生後期（10～3月）	
「書くこと」「読むこと」を友達との関係に生かす（「話すこと・聞くこと」でコミュニケーション力を高めることを継続しながら）	「書くこと」 <ul style="list-style-type: none"> ・交流活動を取り入れた作文学習を設定して、子どもたちが、お互いのことをより理解し合えるようにする。 「読むこと」 <ul style="list-style-type: none"> ・物語文の読みから、子どもたちが自分たちの人間関係を考える学びにする。
第3ステップ 6年生前期（4～9月）	
語彙を豊かにし、自分の生き方を考える（「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」を友達との関係に生かすことを継続しながら）	「伝統的な言語文化」 <ul style="list-style-type: none"> ・ことわざ、故事成語、四字熟語などの言語活動の学びを通して、語彙を豊かにし、自分の生き方を考える学びにする。
第4ステップ 6年生後期（10～3月）	
言葉を大事にして、卒業に向けて協働的な活動を行う	これまでの国語科の学びをすべて活用して、全校に関わる言語活動を協力して行う。

3-5 実践の具体例

① 第1ステップ 5年生前期（2016年4月～9月）「話し合い活動が成立する」

学級活動の時間での最初の話し合いの結果、今のままの学級の状態はよくない、みんなが仲良く過ごせる学級にしたいという望みを、大多数の子どもたちが持ったというA教諭の報告を聞き、今後も折にふれてこの振り返りを継続的に行うよう指示した。そのうえで、日常の国語科の授業からの人間関係づくりを実践するようにしていった。

「話すこと・聞くこと」オープンエンドの話し合い

＜A教諭に対する指導＞

子どもたちは、話をすると、相手からすぐにかかわれそうになる不安や心配がある。感情的になって言い争いになり、話し合いが成立しない。互いを受け入れる温かな雰囲気づくり、まずここから変えるよう指導した。そのためにも、話し合いにはオープンエンドとクローズドエンドの2種類があり、それぞれの目的と、育てる力の違いがあることを説明した。正解のないオープンエンドの話し合いを通して、子どもたちの不安や心配を取り除き、気持ちを楽にして話ができる素地をつくること、また相手の意見を尊重するルールづくりをするよう具体的な指導を行った。オープンエンドの話し合いは7月までで計8回の授業で行われ、そのうちの3回の授業観察を行い、授業後に成果と課題を伝え、次の指導に生かすようにさせた。

＜A教諭の指導実践＞

国語科の「話すこと・聞くこと」の授業で「私の得意なこと」「私のおすすめの本」などをテーマに話し合う場を設定した。正解を求めるものではなく、自分と友達の好みや感じ方、個性の違いを知ることが目的であり、これらの話し合いを通して友達同士仲よくなろうとA教諭は子どもたちに話した。子ども一人一人の学びの経過が見てとれる座席表指導案をもとに話し合い活動を進めていった。ここでA教諭は話し合いのルールの一つ決めた。「相手の話を尊重すること」。ありのままの自分のことを相手に伝えることが大事であり、それを聞いて笑ったり茶化したりせずに、尊重して聞き、感想を述べることを丁寧に説明した。話し合いの途中では、子どもたちに、「自分と友達の共通点と違いは何だろう？」などの具体的な声がけをした。

子どもたちがこの話し合いに慣れてくると、「この町で自分の好きな場所」「今、行きたいこの国」「私がTVに出演するとしたらこの番組」など、子どもたちが興味を持ち、さらにお互いに何を考えているのかを知りたくなるようなテーマを設定した。話し合う時の声の大きさ、顔の向き、うなずきやあいづち、相手の言葉をさえぎらない態度、相手の考えを尊重することなどを指導しながら、話し合い活動を展開させていった。

＜子どもたちの変容＞

はじめのうちは、お互いの出方を見ていて、なかなか活発にはならなかった。しかし、これは正解がない話し合いであり、何を言っても間違いではないという担任の何度かの丁寧な説明に、子どもた

ちは徐々に自分の考えを相手に伝えるようになった。特に、相手の発言尊重のルールは子どもたちの安心感の下支えとなった。

回数を重ねるたびに、子どもたちの言葉が弾むようになり、表情が和らいできた。自分の思いを相手にさらすという自己開示の効用が表れてきた。時には一部の子どもたちから相手の言葉を揶揄する場面も出たが、間髪入れずに担任の指導が入り、すぐに謝る場面が見られた。7月初め頃には、話し合い活動が十分に成立してきて、子どもたちは次の話し合いを期待するようになった。自分と他者との違いを理解し、相手の考えを受容、共感する態度がつくられてきた。

「話すこと・聞くこと」クローズドエンドの話し合い

<A教諭に対する指導>

話し合いの質をさらに高めていくために、次にクローズドエンドの話し合いの指導を行った。何でも自由に言い合い、正解を求めない話し合いと違い、テーマに沿ってグループで話し合い、結論を出すというものである。ここでは相手の意見を尊重しながらも、どちらがよりよい答えになるかの話し合いとなり、人間関係づくりで大事な調整と主張の両面を学ぶことになる。テーマの与え方やそれに沿った授業の流れを、国語科の教材文をもとにしてA教諭に具体的な指導を行った。さらに最終的に決まったものは尊重するというルールの在り方をA教諭に伝えた。

この時に、ただ話し合いをさせればよいというものではなく、話し合うことによって、何を子どもたちに生み出すか、それを教師がどう見とるかが大事な指導留意点となる。話し合いをしたことにより、他者の考えから自分の価値観の広がりや深まりが感じられ、新たな考えにたどりつくような話し合い指導について、具体例をもとにA教諭に説明をし、クローズドエンドの話し合いの指導計画を立てさせた。この話し合い活動の授業を、6回観察し、授業後に成果と課題を伝え、次の指導に生かすようにさせた。

<A教諭の指導実践>

6月下旬、近づいてきた移動教室でのさまざまな決め事を、子ども同士のクローズドエンドの話し合いに生かしていった。例えば「クラス遊びを何にするか」というテーマでは、学級で何か一つを決めるということにした。グループごとに話し合い、それをもとに学級全体で話し合う学習の流れにした。ここで遊びを一つに絞ったのは、さまざまな意見を集約して、みんなが納得する理由をもとに一つに決める話し合いを確立したいというA教諭の強い願いからであった。意見が出され、話し合いがまとまらない時は、A教諭がそのグループの中に入り、だれもが楽しめるようにしようという助言をしていった。また「最終的に決まったものを尊重する」という、クローズドエンドの話し合いで大事なルールをわかりやすく説明をして、新しい学びとなる話し合いの指導を行った。

<子どもたちの変容>

自然豊かな場所でサッカーや野球をしたいという男子の希望が多かった。しかし、天気が悪い時はどうするのか、あるいは運動が苦手な子がいる、女子は男子ほどサッカーや野球がうまくできないな

どの意見が出され、それぞれのグループですんなりは決まらなかった。しかし、A教諭の「だれもが楽しめるように」という助言に立ち返り、サッカーや野球を主張する子たちが、他の希望を言う子たちの考えと折り合いをつけるようになってきた。それまでは男女が分かれて、それぞれ意見の強い子の提案するものに決まることが多かった学級の雰囲気だったが、友達のことを考えて、学級で一つの結論を出そうという姿勢に変わっていった。最終的には体育館で、男女ともに仲良く遊べるゲームに決まった。いろいろな意見があっても、決まったら、それに従って行動しようという教師の話したルールを学級全員で確かめて、人間関係がつくられてきた話し合いとなった。

オープンエンド、クローズドエンドで学んだ話し合いの仕方は、国語の読み取りの授業をはじめ、他教科の話し合い活動にも生きてくるようになった。

② 第2ステップ 5年生後期（2016年10月～2017年3月）「『書くこと』『読むこと』を友達との関係に生かす」

書くこと 交流活動を取り入れた作文学習

<A教諭に対する指導>

「書くこと」の指導では、子どもが書いた作文に教師が評を書き入れて、子どもに返却する、あるいは掲示をした後に返却するということがほとんどである。互いに読み合う場を設定している学習は少ない。そこで交流の場を意図的に設定して、子どもたち同士が相互理解を深めていくことが学級経営に生きてくると考えた。

そこでA教諭に、子どもたちがお互いに作文を読み合った感想をメッセージカードとして付箋に書いて貼る、それを読み合うという交流活動を設定することと、その指導の留意点を伝えた。いくつかのテーマを想定して筆者が書いた作文例をもとに、具体的な手順での進め方の指導を行った。

作文では、題材選びが子どもの興味関心を引き起こすエネルギー源となる。学校行事や学習内容などに関連して、月ごとに題材を考え、子どもたちの反応を予想しながら、A教諭とともに後期の作文指導計画を作った。また付箋に書くメッセージ内容も、単に「いいね」というものだけではなく、自分との共通点、相違点、相手への励ましや称賛などの言葉を考えさせるような手立ての指導を行った。A教諭が作成した指導案をもとに、この交流活動を取り入れた作文の授業観察を後期で計6回行い、授業後に成果と課題を伝え、次の指導に生かすようにさせた。

<A教諭の指導実践>

A教諭はこれまでも作文指導の実践は定期的に行っていた。しかし遠足や運動会の感想文などの生活作文が多く、それに評を書き入れて子どもに返して終わりにしていた。ここで提案した「交流活動を取り入れた作文指導」に、A教諭は新鮮さを感じて意欲的に指導計画を立てた。

「運動会で学んだこと」「移動教室で学んだこと」など、「学んだ」ことをキーワードにして、自分の学びを振り返る作文指導をA教諭は行った。体験した学校行事の内容や意味を考え、作文の最後にその行事で自分は「何を学んだか」を明らかにして文章を書く。そして書きあげた作文を、子ども

同士が互いに読み合う活動を通して、学級の友達がどんなことを考え、何を感じているかがわかってくる。友達の考えを知るとさらに親しくなるということ話を話して、具体的な書き方指導を行った。子どもたちの記述中には、一人一人に寄り添って、付箋に書くメッセージの書き方を個別に指導し、積極的な交流の声かけを行っていた。子どもの作文にはすべてA教諭は評を書き入れ、教師と子ども、子どもたち同士の交流の場が生まれるような設定をした。

<子どもたちの変容>

交流活動を取り入れた作文指導では、目に見える成果が表れた。「友達の声援でリレーを頑張ることができた。友達の応援で元気になることを学んだ」と書いた作文には、「1位でゴールした時は、応援していた私たちも近くの友達と手をたたいて喜んだよ。おめでとう！」というメッセージの付箋が貼られた。「移動教室に行って自然の中にいると、人間は気持ちがさわやかになることを学んだ」と書いた作文には、「いつも都会にしていると慣れてきてしまうけど、ほくも山や川を見て同じ気持ちを味わったよ。」などのメッセージの付箋が貼られた。子どもたちは、それまでの作文学習と違い、書いたものが友達に読まれる、そして感想や励ましがもらえるということに、喜びを持って活動に積極的に取り組んだ。

ここで表れてきた子どもたちの気持ちの変化は、「こんなことを書いて励ましてあげよう」「自分も同じ気持ちだと書くのが喜んでくれるだろう」などの、常に他者の存在を意識した心の在り方である。作文の交流で他者理解の能力が培われ、同時に他者との良好な人間関係を築き上げる力が生まれて、学級経営上、非常に有効な学習になっていった。

交流活動は、日常の学習における学習感想カードにも生かされた。国語科だけでなくさまざまな科目で、時折、授業の終わりに、「今日の授業で学んだこと」などの題で学習感想カードを書かせていた。このカードを友だち同士で読み合い、メッセージを付箋に書いて学習感想カードに貼っていった。「友達のおかげでうまくいった」「友達の助けで課題の中身がわかった」などの感謝の気持ち、助け合う気持ちを、交流するようになったのである。

相手に対する感謝や励ましの言葉は、直接はなかなか言い出せない。恥ずかしさと照れが出て、直接相手に伝えることが難しい。しかしこの付箋によるメッセージによって、それが相手に明確に伝えられることとなり、これを機に、友達の頑張りや友達の良さを見付けていく姿が表れてきて、よりよい人間関係が育まれてきた。

読むこと 人間関係を考える読み

<A教諭に対する指導>

「読むこと」の指導で、学級経営に結びつける発想を持つ教員は非常に少ない。物語教材の読みでは、叙述に即して登場人物の心情の変化を読み取り、それに対して感想を述べたり書いたりする授業がほとんどである。しかし人物の心情を読み取ったことから、自分のことを振り返り、それを学級内の人間関係に置き換えると学級経営に生きてくる。

そこで、まず低学年の物語教材をもとに、学級経営の視点で読むとどこが大事かという指導をA教諭に行った。「お手紙」では、親友の心の痛みに気づくようにさせるために、「スイミー」では、ものごとを成し遂げる時の協力の大切さを考えさせるために、どの叙述に目をつけ、どのような発問を子どもたちに投げかけるかを、A教諭とともに考え、その留意点を指導した。そして5年生の教科書教材の中から、「大造じいさんとガン」「わらぐつの中の神様」を取り上げ、A教諭に、どう指導したら効果的になるかを考えさせた。

A教諭への指導は以下のように行った。A教諭が作成した指導案をもとに物語の授業観察を3回行い、授業後に成果と課題を伝えた。国語の読みと学級経営の観点での読みが成立するような授業展開の方法を、他教材を基に話して指導を行い、次の教材指導に生かすようにさせた。

<A教諭の指導実践>

A教諭は、国語の教材文を学級経営における子ども同士の人間関係づくりという新たな視点で読み直し、それぞれの教材ごとに指導する叙述を見出すようになった。例えば5年生の物語教材の「わらぐつの中の神様」では、懸命になってわらぐつを作ったおみつさんに対して、店の前を通りかかった男の人が「わらまんじゅうかと思った」と冷やかす場面がある。この言葉に、おみつさんは大きなショックを受ける。この箇所は、この物語の山場ではなく、通常、ただ読んで通り過ぎてしまうような場面である。しかしこの叙述を視点を変えて読んでいくと、このように読み取ることができる。

おみつさんは、履く人の気持ちを考え一生懸命にわらぐつを作り、何とかそのよさを認めてもらい、買ってくれる人がいないだろうかを考えていた。しかし、そんな気持ちは道を通る人には通じない。おみつさんにとって、心ない言葉に聞こえようが、それは相手にとっては何気ない一言だったのである。このように「何気ない一言が、相手を深く傷つけることがある」ということを、この場面の叙述から考えさせ、日常の自分たちを振り返る場を設けた。物語の中で生まれる人間同士の葛藤、誤解、共感などは、自分の生活の中にも存在するのではないかという視点で読むと、ものの見方が広がるという話をA教諭は子どもたちにした。そしてこれから出会う物語の中で表現されている人間関係と自分との共通点があるかを考えてみると、読みが変わり、読みが深まると子どもたちに語った。

<子どもたちの変容>

「わらぐつの中の神様」の読み取りから、自分もこれまで友達の言葉で傷ついたことがある、でもこの話のように相手はそれほど深く考えていた言葉ではなく何気ない一言だったかも知れない、という自分たちの経験を振り返った感想が次から次へと出てきた。物語を読んで、その人間関係が、自分とどう結びつきそうかという視点は、子どもたちにこれまでにない新たな読みの喜びを与えたと思われる。物語の人物の言葉や受け答えの会話を、これまで以上に注意深く読むようになり、物語文を読みながら、人間関係を我が事のようにとらえるようになった。そして5年生の教材だけでなく、これまで学習してきた前学年までの物語をもう一度読み直す子も出てきて、今までと違った言葉の見方、考え方ができるようになってきた。

③ 第3ステップ 6年生前期(2017年4月～9月)「語彙を豊かにし、自分の生き方を考える」
「我が国の言語文化に関する事項」

<A教諭に対する指導>

「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の学習を、6年生教材でどのように構築するかを、具体的な教材を使ってA教諭に指導を行った。それに加えて6年生からは、古典の学びを友達の間関係に生かす授業づくりをA教諭に提案した。

子どもたちの課題と感じていたのは、語彙の貧しさである。「やばい」「きもい」などの一言で済ますような語彙の貧しさを変えていきたいという思いは、A教諭との間で共通のものであった。そこで以前からの計画どおり最高学年の6年生にふさわしく、古典から学ぶ言葉を自分たちの学級に取り入れ、中学生に向けて、語彙を豊かにする指導をA教諭に提案した。我が国の言語文化には、「ことわざ、故事成語、四字熟語」などがある。これらには先人の人間としての生き方の知恵、ヒントなどが表れている。その言葉に着目すれば、語彙を広げると同時に、自分たちの生き方につなげていくことができると考えたからである。

この考えをA教諭に話し、特に子どもたちにこれだけは学ばせたいという「ことわざ、故事成語、四字熟語」など数十を選んで、具体的にどのように子どもたちに指導をするかの指導案をA教諭に立てさせ、留意点を指導した。この学習は、朝の会での活動だったので、観察しての指導が難しく、A教諭からの報告を聞き、今後の指導に向けての改善案を示した。

<A教諭の指導実践>

5年生までの学習で、国語科の各領域で学級経営に結びつく指導を行ってきたA教諭は6年生の国語科教材でも、それぞれの領域で人間関係づくりを視点にした指導を続けていった。そして、そのうえで、古典を代表する言語文化を学級経営に生かす指導を取り入れた。6年生の始まるの時期に、「光る言葉」のコーナーを設けた。古典を中心にして、日頃の読書などで学んだ言葉から、自分たちの生活に彩りを与え、生き方の光を与える言葉が子どもたちが選ぶようにした。それを子どもたちが日替わりで紹介する言語活動を実践した。

A教諭は学校図書館にある「ことわざ、故事成語、四字熟語」などの本を教室に資料としてそろえ、その一部を子どもたちに紹介した。例えば、「情けは人のためならず」ではこのように話した。人に親切にすると、いずれ巡り巡って、自分も他人から親切にされることがある。だから、親切にすることは決して他人のためだけではない、自分にも返ってくることであるということ、自身の体験からの具体例を用いて語った。友達に優しくすることは、自分もまた友達から優しくされることにつながると子どもたちは受け止めた。A教諭は、毎日の「光る言葉」のコーナーの中で、日本にはたくさんの古典文化があふれていて、それらを一つ一つひもとくことで、自分の人間としての中身が豊かになるという話を、その日の言葉に合わせて指導を行った。

<子どもたちの変容>

A教諭の話に刺激を受け、さっそく子どもたちは興味を持ってことわざや故事成語の紹介の本を読

むようになった。その事例を挙げる。

「雨だれ石をうがつ」ということわざを、「そんなに力があるとは思えない雨のしずくでも、長い間、同じ石の上に落ち続けていると、ついには固い石に穴を開けてしまうこともある」という意味と紹介した子がいた。このことわざから、「小さな力でも辛抱強く努力を続ければ必ず成功する」という気持ちを持って、毎日、努力することの大切さを学級の友達に伝えた。学習でもスポーツでも、日々、頑張る続けること大切さを改めて考え、このことわざから、自分のことを振り返るようになった。「継続は力なり」のことわざもここから関連づけて学習をした。

同じような意味を表す場合でも、ことわざや故事成語、四字熟語などの言葉で言い切ると、ものごとの真理を言い当てる印象となる。そのことが子どもたちにとって、以前よりも一歩、大人に近づいてきた誇らしさを感じさせるようになってきた。ことわざそのものは、中学年でも学習したが、最高学年の6年生のこの段階で学ぶと印象が変わってくる。大人に近づいた喜びが、古典的な言い回しの言葉を取り入れるようになったと考える。この「光る言葉」の紹介は、6年生の始まりと同時にスタートしたのが、いい時機であった。

もちろん何でも取り入れられたわけではない。理解した言葉をそのまますべて活用できるわけではない。しかし古典の言葉の中から、不自然にならずにその言葉を自分たちの学級生活に、少しでも取り入れるようになった姿勢に意欲を感じた。それ以外にも、読んだ本の中から、登場人物が語る言葉で心に残る言葉を紹介する子が出てきて、それらは一つ一つ教室の壁面に貼られ、これまでにない語彙の広がり学級内に表れてきた。

④ 第4ステップ 6年生後期（2017年10月～2018年3月）「言葉を大事にして卒業に向けて協働的な活動を行う」

<A教諭に対する指導>

いよいよ卒業に向けて最後のステップを迎えた。これまで国語科で学んだ言語能力を使い、学校中の教員や子どもたち全員に、6年生が培ってきた言葉の力の成果が伝わるような大きな活動を作りあげることをA教諭とともに考えた。

6年生後期の大きな行事として展覧会と卒業式がある。ここで自己表現、他者理解の力が生かされるよう、展覧会の会場で作品説明を行う「ギャラリートーク」、卒業式での「門出の言葉作り」の計画を立て、協働的な活動を行うこととした。

ギャラリートークではこのような活動を行った。各学年の作品の前に作品説明をする学年代表の子がいる。インタビュアーは6年生の子である。2日間の展覧会で、日にちと時間ごとに分担を決めて、6年生の子どもたちは、学年の作品を説明する子とインタビュアーとに分かれる。全員がどちらかの役割を担うことにした。作品のよさを、代表の子から聞き出すことについては、台本通りに進行するのではなく、対話形式のインタビューを行い、会場内にいるどの観客にも共通する疑問や、感想を述べるのが大事であることを指導した。

また通常は教師たちが作る卒業式での門出の言葉を、子どもたちの言葉で作りあげ、子どもたち自身の表現で声を出すところに価値を見出す。これまでの国語科指導で培った学力がすべて表れるような内容の充実を、A教諭が子どもとともに目指すことが、2年間の学級経営の締めくくりとしてふさわしくなると指導した。

いずれの行事もA教諭が指導の細案を作成し、教師の言葉、指示、その留意点などについての指導を行った。保護者参観日での展覧会の「ギャラリートーク」と、卒業式に向けての「門出の言葉作り」の学習の観察から、次の指導に生かせるような指導助言を行った。

<A教諭の指導実践>

ギャラリートーク準備では、子どもたちに「6年生の作品のどんなところを会場内の人たちに伝えたいか」「他学年の作品のよさをどのようにして聞き出すか」を十分な時間をとって話し合いを行った。最も多く出てきたものは、各学年の作品の制作までの苦労や見所であった。それを引き出すための質問の仕方や、予想される相手の言葉への反応などをどう考えたらいいのかを、ワークシートをもとに子どもたちに考えさせ書かせた。そしてそれをもとに、各グループごとに模擬インタビューを行わせた。ここで出てきた成果と課題を本番のインタビューに上手に生かせるように、ワークシートに書かれた内容と本番のインタビュー準備の資料を結びつける指導を行った。

卒業式では、それまで教師が作っていた門出の言葉を、自分たちで作るという誇りと喜びを子どもに持たせるような指導から始めた。1年生から6年生までの思い出を短い言葉で書かせ、前年の「卒業式門出の言葉」の台本を読みながら、自分たちが考えた言葉を台本のこの場面で使いたいという希望をできるだけ生かすようにしていった。グループごとに考えを話し合わせ、書いたものを読み合っており、さらに表現をよくしていくために、友達同士で聞き合いをさせて、その内容を高めていく指導を続けていった。

展覧会のギャラリートークは10時間、卒業式の門出の言葉作りは15時間と、それぞれ準備に多くの時間をかけた単元となり、丁寧な指導を続けていった。

<子どもたちの変容>

展覧会では、会場に訪れる人たちが展示している作品を見るだけのことがほとんどである。しかしそれを子どもにインタビューして、作りあげるまでの苦労などの話を聞くという活動は画期的であり、この学校で初めての試みであった。最高学年として展覧会を盛り上げようと子どもたちは張り切った。学年での制作苦労を聞きだし、それを復唱して会場内にいる人たちにわかりやすく伝えていた。保護者も大勢集まり、ギャラリートークを保護者が大変熱心に聞



図表2 門出の言葉作りのために話し合いを行う子どもたち

き入り、質問もして、最後は子どもたちに大きな拍手を送った。展覧会後の感想では、展覧会におけるこの学校の新しい歴史をつくった誇りを多くの子どもたちは書いていた。

そして小学校生活最後の学校行事である卒業式に向けて、子どもたちは「門出の言葉」作りを行った。テーマ別にグループに分かれて、どのような言葉がふさわしいか、どんな言葉を言いたいかを、さまざまな観点から話し合った。（図表2の写真）子どもによって言いたい言葉や場面が違ってくる。お互いの話を聞き合いながら、それを上手に受け止めて、話し合いで折り合いをつけていった。そしてよりよい表現の仕方、声を出す時の留意点なども自分たちで考えていった。教師主導ではなく、子どもたちが主体的となったこの学習であった。これまでにない笑顔で満ち足りた表情が見てとれた卒業式の成功は、自己表現、他者理解、それと同時に言葉を使ってものごとを成し遂げるという、これまで培われた言葉の力から生まれたものであった。

4 まとめ

2016年5月から2018年3月の卒業まで、原則月1回（時には月2,3回）の学校訪問は計28回に及んだ。毎回、A教諭の授業観察を行い、観察記録をもとに指導助言を行い、「国語科教育を基盤とする学級経営」の実践を指導してきた。当初は仲間意識が薄く、友達への言葉が荒っぽく冷たかった子どもたちは、2年間の実践で次のような変容が見られた。

- ① 友達の意見や考えを聞き、それを上手に受け止められるようになってきた。受容と共感の姿勢が身につけてきた。
- ② 根拠をもとにして自分の考えを表現できるようになった。
- ③ 話し合い活動を多く設定することにより、お互いの考えや感じ方を知ることになり、友達への理解が深まり、人間関係が深くなった。
- ④ 言葉に対する感受性が育ち、言葉の使い方に気をつけるようになった。自分の気持ちの表現、相手を理解する気持ち、それぞれの力が高まった。
- ⑤ ものごとに対して前向きに主体的に協働的に取り組むようになった。友達同士が互いに学び合う関係がつくられた。

全体として子どもたちに確かな成長が見られ、A教諭の実践の成果は大きかった。しかし子どもたちの状態は決してすべてにおいて順調だったわけではない。5年生の1月には、教室で落ち着きが見られない子の対応を巡っての言い争いが続いたことがある。6年生の夏休み明けには、女子同士の対立があり、学級内が一時よくない雰囲気になりかけたこともある。A教諭が自分の指導に自信を失いかけたことも二度や三度ではなかった。

しかし、熱心な指導を継続してきたことから、子どもたちからは大きな信頼を得るようになっていった。学級で問題が出た時、担任に頼らず子どもたち自身で「話し合い」をして解決していった。「これは自分たちの問題だから」と子どもたちは言った。「自分に足りない力を自己診断して、自分に必要な資質・能力を主体的に高めていこうとする成長動機を自己成長力」（田中2009）と呼んでいるが、

まさに自分たちで問題を主体的に解決していこうとする自己成長力が育まれてきたと言ってよい。

校内の教員たちはこの6年生の子どもたちの成長を、「今までの本校での6年生で最高の学年」と絶賛し、保護者からも大きな信頼を寄せられる学級となった。

その原動力になったのは、国語科の授業を通して、言語能力の育成に努め、自己表現、他者理解、共同生活の能力を伸ばすための指導を行ったことである。A教諭の熱意あふれる姿と、常に子どもたちに人間関係づくりを考えさせる指導の手立てが、子どもたちの意識を変えていった。A教諭の実践例から「国語科教育を基盤とする学級経営」の有効性が示されたと考える。また新学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」が新しい学びの型として位置づけられている。これまでよりさらに主体的に学ぶ姿が求められる。これは学級生活でも同じである。子どもたち自ら進んで、学級をよりよくしていこうとする態度育成を目指さなければならない。

これからの課題としては、現場の教員にも、そして教員志望の学生にも、国語科教育と学級経営の結びつき、その仕組みを各研修会や大学教育等で、より強く明確に示していくことが大事である。この実践報告がその試みのモデルのひとつとなればと考える。

【参考文献】

遠藤真司「国語科を通して考える学級力の向上」季刊「理想」理想教育財団 2017

遠藤真司他「授業力ガイドブック」明治図書 2017

白松賢「学級経営の教科書」東洋館 2017

末松裕基、林寛平「未来をつかむ学級経営」学友社 2016

田中博之「学級力向上プロジェクト3」金子書房 2016

田中博之「アクティブラーニング実践の手引き」教育開発研究所 2016

野口芳弘「子どもは授業で鍛える」明治図書 2008

野口芳弘「学級づくりで鍛える」明治図書 2015

二瓶弘行「国語教室の極意～学級づくり編～」東洋館出版 2015

渡辺晴美「伝統的な言語文化の言語活動」明治図書 2012